



鶏けいめい鳴

〒221-0864

横浜市神奈川区菅田町2851

(電話 045-473-7191)

パウロの言葉

「愛がなければ、無に等しい」

聖書 (第1コリント書13章2節)

牧師 河合裕志

この13章は「愛の賛歌」の章としてよく知られているところ。この冒頭でパウロは繰り返し「愛がなければ」と述べている。少し引用が長くなるけれど以下にそれを記してみる。まず「愛がなければ」の1回目。

「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル」。異言は宗教的エクスタシーに達して口から出て来る、他人には意味不明の言葉。この経験を誇る人々がいて、この域に達していない人を見下げた。これについてパウロは、そこに愛がなければその言語発声は騒音でしかないとした。この場合の愛は他人を決してバカにしない、ということか。

2回目。「たとえ、預言する^{啓示}賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい」。これもパウロの思い切った言葉。預言、神秘(奥義)、知識、信仰、どれも素晴らしい賜物、この一つにでも豊かに与ることが出来ればと願われる。

ここにおいてもそこに愛がなければ無だ、ナッシングだ、と断言するのはどのような事情によるのか。やはりそこにはこれを持つ者の誇り、おごり高ぶりが見てとれると

いうことか。むしろ益々謙遜になれと言いたいのだろう。

3回目。「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない」。これも過激と言ってよいような言葉。全財産を貧しい人々のために使い尽くす、これ以上の愛はないのではないか。イエスも金持ちの男に「持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」と言っている。わが身を引き渡す=殉教ということも信仰の極致、なかなか出来ないこと。こうした場合にも愛がなければとはどう言えばよいか。やはりそこにも誇りが、売名行為がないか、ということなのだろう。多額の寄付や殉教の死さえ自分の名を売りこむことになる。不純な動機をパウロは見逃さなかった。

以上異言から殉教に至る、様々なケースがあげられた。どれも良いもの。これをパウロは否定しない。ただどの場合にも他人を思いやる愛の心が根底になければいけないとした。私達、日々いろいろと考え行って来ているけれどその際、愛の規準を立てたらどうだろう。その行いには愛があるか、ないかと。

集会案内

日曜礼拝：午前10時15分、日曜夕拝：午後6時

子どもの教会：日曜日午前9時

中高青年会：日曜日礼拝後

聖書を学び祈る会：水曜日午前6時、午前10時、午後7時

お話し会、(面談)：水曜日午後1時~7時